



## 自伝的エピソード記憶検査 (Test Episodique de Memoire du Passe autobiographique) の日本語版作成の試み

著者	関口 理久子
雑誌名	関西大学心理学研究
巻	1
ページ	41-52
発行年	2010-03
その他のタイトル	An Attempt to Make the Japanese Version of Autobiographical Episodic Memory Test (Test Episodique de Memoire du Passe autobiographique)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/7042">http://hdl.handle.net/10112/7042</a>

# 自伝的エピソード記憶検査 (Test Episodique de Mémoire du Passé autobiographique) の日本語版作成の試み<sup>1)</sup>

関 口 理久子 関西大学社会学部

An Attempt to Make the Japanese Version of Autobiographical Episodic Memory Test  
(Test Episodique de Mémoire du Passé autobiographique)

Rikuko SEKIGUCHI (Faculty of Sociology, Kansai University)

This study was designed to make the Japanese version of autobiographical episodic memory test (Test Episodique de Mémoire du Passé autobiographique, TEMPau, Piolino et al., 2003) under the permission of the author of French original version of TEMPau. The TEMPau has been devised by Piolino et al. (2003) to evaluate specificity (uniqueness, spatio-temporal location, details), autoegetic consciousness (R-responses) and self-perspectives (Field or Observer) of autobiographical episodic memory across the five life time periods (Period 1: 0-17 years old, Period 2: 18-30 years old, Period 3: more than 30 years old except last 5 years, Period 4: last 5 years except last 12 months, Period 5: last 12 months). The result revealed the followings. 1) The score of spontaneity during Period 5 was higher than that during Period 4, and the field-view points during Period 5 were more than those of Period 3. 2) Although the specificity of autobiographical episodic memory was not significantly different across the five periods, R-responses (what-R, when-R, where-R and total R) during Period 5 were the fewest across the periods. 3) The correlation between total R-responses (the first test) and total Rj-responses (the second test) indicated that the reliability of the episodes recalled by participants. 4) The correlation between each scores of TEMPau and Emotional regulation questionnaire and BDI-II were not significant, and the correlation with the performance of the executive function tasks indicated positively significant. 5) The each score of the Japanese version was almost the same as the French original version of TEMPau. These findings suggested that the Japanese version of TEMPau was as reliable as the French original version of TEMPau.

**Key words:** autobiographical episodic memory test, autoegetic consciousness, self-perspectives, executive function

*Kansai University Psychological Research*  
2010, No.1, pp.42-52

自伝的記憶 (autobiographical memory) とは、自分がいつどこでなにをしてどう感じたかなど、特定の時期や場所で個人の過去に起こった出来事や事件についての想起であり、エピソード記憶と同義に扱われることが多い。しかし、エピソード記憶と自伝的記憶を

厳密に区別する Conway (1990, 2001) は、エピソード記憶とは、時空間に定位された自分の特定の経験それも比較的最近 (数分から数日) の経験の記憶であり、感覚知覚的に詳細な特徴を備えているが、それほど時間的に長くは保持されないとしている。一方、自伝的

1) 本研究は、平成 18 年度関西大学在学研究による成果を発展させたものである。

記憶は、自分に起こった経験としていつでも想起することができる自分の経験の記憶であり、感覚知覚的に詳細な特徴を薄れさせており、個人的解釈やイメージの影響を受けやすい。エピソード記憶は、時間の経過とともに、自伝的記憶システムすなわち自己記憶システム (self memory system) に統合され、その後は何年経っても想起できる自伝的記憶になる。自伝的記憶は、階層的で入れ子構造になっており、自伝的記憶は、一般的 (general) で意味的な記憶から、特異的 (specific) でエピソード的な記憶まで広がり、時間的にも人生のある時期の記憶から、繰り返しのある出来事、特異的な 1 度きりの体験にまで及ぶものである (Cabeza & St. Jacques, 2007)。

一方、多くの自伝的記憶の研究では、エピソード記憶と自伝的エピソード記憶の区別はせず、どちらも過去の出来事を体験しているかのように意識している心的状態であるとしている。Levine (2004) によると、自伝的エピソード記憶は、個人の過去の記憶から時空間的に定位できる出来事を意識的に想起すること (conscious recollection) と定義できる。この過去のある時点に心的に立ち戻ろうとする (mental traveling back to the past) 意識状態は、出来事を想起し、感覚的詳細、その時の思考、および想起者が自分自身の過去にあった出来事を意識しているという感覚によってもたらされる。自伝的意味記憶は、自分の過去についての知識や事実であり、自分のアイデンティティについての知識、個人の特徴、個人史のデータ、および自分の過去のできごとを意識するときにその補助となる事実、すなわちその出来事が起こったということを知っている状態を含んでいる記憶である。

Piolino, Desgranges, Belliard, Matuszewski, Lalevé, de la Sayette & Eustache (2003) は、半構造化インタビューによる新しい自伝的エピソード記憶検査 (Test Episodique de Mémoire du Passé autobiographique; TEMPau) を開発してきた。この検査では、人生の各時期における自伝的エピソード記憶の特異性 (specificity)、すなわち時空間に定位された唯一の体験を詳細に語るができるかどうかということ、自己認識的意識 (auto-noetic consciousness)、自己視点 (self-perspectives) を、5つの時期 (0-17 歳、18-30 歳、30 歳以上、最近 5 年間、最近 1 年間) に渡って評価する質問紙である。この質問紙は、Borini, Dall'ora, Della Sala, Marinelli & Spinnler (1989)、Kopelman (1989) そして Piolino, Desgranges & Eustache (2000) および Piolino, Desgranges, Banali &

Eustache (2002) の自伝的記憶検査を元に開発されたものである。

自伝的記憶は、過去のある時点に心的に立ち戻るような感覚で特徴付けられるものであり、記憶再生過程において過去の再体験の感覚 (sense of reliving) を伴っている (Tulving, 2002)。自己認識的意識とは、エピソード記憶の特性と定義され、このような心的に立ち戻る感覚が意識されるが、一方、認識的意識 (noetic consciousness) は、そのような感覚がなく、単に熟知感または知っている感覚が意識されるだけである (Gardiner, 2001)。このようないわば回想的な体験 (recollective experience) は、課題手続き上では思い出している／知っているパラダイム (Remember(R)/ Know(K) paradigm) により確かめることができるとされている (Tulving, 1985; Gardiner, Ramponi & Richardson-Klavehn (1998) Gardiner, 2001)。エピソード記憶の研究では、例えば、項目のリスト学習を行い、その後、実験参加者が再生または再認した項目を「憶えている (remember)」のか、単に「知っている (know)」のかを尋ねる。「憶えている」というのは、再生や再認段階での学習経験を想起することを意味している。つまり、ある単語を提示された時には、その単語から連想される特定の事象の記憶や他の項目や文脈との連合などを想起し、回想的経験として、最初の学習エピソードに連合された経験を再体験することである。しかし、「知っている」場合には、その単語がリスト提示されたことは確信できるが、その単語からはそのような回想的経験は生じない。

また、最近の自伝的記憶研究では、自分自身の目すなわち視野視点 (field) で見ているように感じるか、第三者の観察者の視点 (observer) で見ているように感じるかという再生された記憶の自己視点の研究されてきた (Nigro & Neisser, 1983; Robinson & Swanson, 1993)。Nigro & Neisser (1983) は、最近の記憶を再生するときには、体験時と同じ視野視点で思い出しているが、昔の記憶を再生するときには第三者の観察者の視点で思い出しているとしている。さらに、この 2 種類の視点は、最近の鮮明な記憶の場合には両方の視点で思い出すことが容易であるが、昔の鮮明でない記憶の場合には困難であり、この視点の転換は自己認識的意識と認識的意識の転換に対応しているとされている (Robinson & Swanson, 1993)。

自伝的エピソード記憶検査 (TEMPau) は、5つの時期の自伝的エピソード記憶の特異性を調べるだけでなく、いつ・どこで・なにをしたに関する意識の状

態を思い出している／知っているパラダイムにより、また、自己視点について視野／観察者パラダイムにより尋ねる手法を加えた新しい検査である。この検査を用いて、若年と老年の健常者 (Piolino, Desgraanges, Clarys,Guillery-Girard, Tacoscnnat, Isingrini & Eustache, 2006)、神経学的な損傷の患者 (Piolino et al., 2003; Matuszewski, Piolino, de la Sayette, Lalevéé, Pélerin, Dupuy, Viader, Eustache & Desgranges, 2006)、精神疾患の患者 (Danion, Cuervo, Piolino, Huron, Riutort, Peretti & Eustache, 2005; Lemogne, Piolino, Friszer, Claret, Girault, Jouvent, Allilaire & Fossati, 2006) の自伝的エピソード記憶の研究が行われている。

感情の制御に関する個人差と記憶は密接な関係があることが報告されてきた。Gross & John (2003) は、感情調節 (emotional regulation) のプロセスには、認知的再評価 (cognitive reappraisal; 以下、再評価) の方略と、表出行動を抑制するという行動的調節であり表出の抑制 (expressive suppression; 以下、抑制) の方略があり。これらの2種類の方略の使用にはかなりの個人差があることが予測されるとしている。そこで彼らは、日常的な方略使用の個人差を測定するために感情調節質問紙 (Emotion Regulation Questionnaire; 以下、ERQ) を開発している。このERQにより測定した実験参加者のうち抑制方略を常に用いる者は、客観的な記憶や自己に関する出来事に対する記憶が悪いことが示されている (Richards & Gross, 2000;Gross, 2002)。また、D'Argembeau & Linden(2006) は、自伝的記憶と感情調節の関係を自伝的記憶検査 (the Autobiographical Memory Questionnaire, Rubin, Schrauf & Greenberg, 2003)、記憶特性検査 (Memory Characteristic Questionnaire, Johnson et al, 1988)) および ERQにより調べ、常に感情の抑制を行う者は自伝的記憶再生時の感覚的、文脈的、感情的な詳細さが少ないことを示している。

特定の感情状態のうち特に抑うつ気分と自伝的記憶の関係を検討した研究は多い。臨床的には、大うつ病 (major depressive disorder, MDD) の患者の自伝的エピソードを調べると、健常な被験者に比べて、より概念的で個々のエピソードの持続時間が長い (Williams & Scott, 1988; Brittlebank, Scott, Williams & Ferrier,1993) ことから、Williams (1999) は、このような記憶を過度に一般化された記憶 (overgeneral memory) と呼んでいる。過度に一般

化された記憶とは、自伝的エピソードの再生に際して、通常は時空間に定位された個人的なある特定のエピソードを再生できず、エピソードが過度に一般化または抽象化され、特定の時空間的情報が欠落したり、1日以上以上の繰り返しの出来事の想起になるという特徴を持っている。また、このような過度に一般化された記憶は、MDDの患者の認知的特徴を評価する方法として用いられている (Williams, 1999; Nandorino, Pezard, Poste, Réveillère & Beaune,2002)。Williams (1999) は、過度に一般化された記憶を示すのは、特性的抑うつつの被験者の場合であり、不安や状態の抑うつではこのような傾向を示さないとしている。しかし、14の研究をメタ分析したvan Vreeswijk & de Wilde(2004)によると、過度に一般化された記憶を顕著に示すのはMDDの患者であるが、状態的抑うつ気分との関係がある可能性も示されている。

Miyake, Friedman, Emerson, Witzki & Howerter (2000)では、実行機能または前頭葉機能でよく取り上げられる3つの機能を仮定した。3つの機能とは、課題やメンタルセット間の切り替え (shifting between tasks or mental sets、以下切り替え機能)、ワーキングメモリー表象の更新と監視 (updating and monitoring of working memory representations、以下更新機能)、優勢な反応の抑制 (inhibition of dominant or proponent responses、以下抑制機能) の3つである。切り替え機能は、"attention switching"とも言われ、課題間、心的セット間、操作間の切り替え機能である。更新機能は、ワーキングメモリーの概念と密接に結びついており、背外側部の前頭葉とも関連している。更新機能は、課題に関連する入力情報を監視しコード化し、ワーキングメモリーにある情報と関連がなくなった古い情報とを入れ替える機能である。抑制機能は、必要な場合に、最も優勢で自動的な反応を、意図的に抑制する機能である。Miyake et al.(2000)は、この3つの機能の分離性について検証的因子分析より検討し、3つの実行機能は互いに中程度の相関を持つが、明らかに分離できることが示された。これらの3つの実行機能のうち、切り替えと更新は、長期記憶の再生時にも必要な機能であり、この機能が損なわれると長期記憶の再生が困難である。また、最近では、Clarys, Bugaiska, Tapia & Baudouin(2009) は、実行機能と老化により衰えるエピソード記憶の関係を検討し、R/K反応のうちR反応は、切り替え機能や抑制機能を測定する課題成績と相関があることが示され、特に更新機能は老化による記憶の低下と関連す

ること、またK反応には相関がないことが示されている。

本研究の目的は、Piolino et al. (2003) により開発された自伝的エピソード記憶検査 (TEMPau) の日本語版作成を、仏語オリジナル版著者の許諾の元で試みることである。この目的のために、仏語オリジナル版を邦訳し、仏語版著者および日本語版訳者が質問項目と採点の基準について確認し、日本語版TEMPauを作成を試みた。検査に際しては、自伝的記憶の再生に影響する要因として、個人特性では抑うつと感情調節、また、実行機能のうち切り替えと更新機能を取り上げ、これらの特性や機能を統制した上で、日本語版TEMPauを施行することを目的とした。

## 方法

実験参加者 女性9人 (平均年齢 46.4 歳, 39~57 歳)

自伝的記憶検査 日本語版TEMPauは、仏語オリジナル版を邦訳し、仏語版著者および日本語版訳者が質問項目と採点の基準について確認した。この検査は、中5日~7日で2回行う検査である。1回目の検査は、5つの時期における4つの主題についてエピソード再生を求めるものであった。5つの時期とは、時期1 (子ども時代から思春期の時期 0~17 歳)、時期2 (若い成人の時期 18~30 歳)、時期3 (より年をとった成人の時期 30 歳~5 年前まで)、時期4 (最近1年間を除く過去5年間)、時期5 (最近12ヶ月) であった。4つの主題とは、出会い、学校生活 (時期1のみ) または仕事 (時期2~時期5)、旅行、家族としたことであった。ただし、時期5に関しては、去年の夏・去年のクリスマス・先月・先週中・先週末・一昨日・昨日・今日の時期に起こった出来事について4つの主題に限らず再生を求めた。各エピソードの再生後には、視点 (視野/観察者視点、以下F/O視点) を尋ね、何・いつ・どこについて自己認識的意識 (覚えている/知っている、以下R/K反応) を尋ねる項目を設けることで、想起時の自己認識的意識と視点を得点化した。2回目の検査では、1回目の再生のうち何・いつ・どこのR反応であったエピソードの2度目の再生 (Rj反応) を確認した。これは、エピソードが虚偽でないことを確認するために行った。

その他の検査 1) 抑うつ状態の測定 参加者の抑うつ状態を統制するために日本語版BDI-II (小嶋・古川, 2003) により抑うつ状態を測定した。2) 感情調節の個人差の測定 Emotional Regulation Questionnaire

(ERQ, Gross& John, 2003) を著者が和訳したものを著者以外の2名によるバックトランスレーションを行った後に日本語版として作成したものを用いた。3) 実行機能の測定 トレイルメーカー課題 (the trail making task, Reitan, 1958) と文字記憶課題 (The letter memory task, Morris & Jones, 1990; Quinette, Guillery, Desgranges de la Sayette, Viader, Eustache, 2003) を行った。トレイルメーカーテストは、パートAとパートBからなり、パートBが切り替え機能の課題として用いられている。文字記憶課題は、文字列が系列的に1個ずつ提示され、最後の4つを答える課題である。文字系列は4桁から10桁の系列で2試行の練習後、16試行64個の再生を行う課題であった。

手続き 日本語版TEMPauは、中5日~7日で2回行われた。第1回目の日本語版TEMPau施行前にまず全体の検査についての説明、次に、自伝的エピソードとはどのようなものかについての説明 (Appendix 1) を行った。また、F/O視点については図 (Appendix 2) を提示しながら説明し R/K反応についての説明も文章 (Appendix 3) を提示しながら行い、この図や文章は特に参加者が話しやすいように、参加者の前には常に提示されていた。次に、時期1の4つの主題について自伝的エピソード記憶を再生させた。もし自伝的エピソード記憶の再生がない場合には、参加者の想起を4回まで促すが、それでも想起がないときは次の主題に進んだ。時期1終了後は時期2、時期3、時期4、時期5と進み、検査用紙 (Appendix 4) に記入し、第1回目の検査を終了した。その他の検査は、第1回目の検査終了後にすべて行われた。第2回目の検査は、1回目の再生のうちすべての時期のすべての主題について、何・いつ・どこのR反応であったエピソードの2度目の再生 (Rj反応) を口頭で確認した。この際には、時期および主題の提示はオリジナル版と同じランダムな順序で参加者に提示され、確認が行われた。

データ分析方法 各参加者の各時期ごとのエピソードについて、エピソード性 (0~4点)、自発性 (1~4点) 得点を算出した。再生エピソード (216個) の叙述内容について、評価基準 (Table 1) に基づいて著者以外の評定者2名による評価を行なった ( $\kappa = .67, p < .001$ )。オリジナル版では、評価が異なる場合は、評定者2名の話し合いにより評定を一致させたが、日本版では、2名の得点を平均したものをエピソード性得点とした。この得点のうち、評定者2名ともが4点としたエピソードの数を最詳細エピソード得点とし

た。自発性得点は、4 回促しても想起なしの場合は 1 点、すぐ想起できた場合は 4 点とした。F又はO反応数、何・どこ・いつについて尋ねたときのR又はK反応数、Rj反応数を計算した。評価項目のうちエピソード性および最詳細エピソード得点、自発性得点、F反応、O反応、何R反応、どこR反応、いつR反応、総R

反応、総Rj反応を従属変数として、時期を独立変数とする 1 要因 (5 時期) の分散分析を行った。主効果が有意な場合の多重比較は、HSD検定により行い、その際の有意確率は 5%とした。すべての時期の総R反応と総Rj反応については、真偽性の検討のためピアソンの積率相関係数を算出した。他の検査と上記の評価項目

**Table 1** Criterion for evaluation of episodic specificity.

評定値	エピソード性の段階	例
4	特定の出来事 (唯一で時間的かつ空間的に特定された情報源)、詳細 (考え、感情、知覚など…)	「～という場所で、～の時に、～のようなことがあった」、「その時、誰々が一緒にいた」、「私が (誰々が) ～と言った、考えた、感じた」などが再生できる。
3	特定の出来事 (唯一で時間的かつ空間的に特定された情報源)、詳細ではない。	「～という場所で、～の時に、～のようなことがあった」
2	1.一般的な出来事 (繰り返されたり、持続したりしている時間的に特定された情報源、または、2.唯一のだけが時間的あるいは空間的に特定されない情報源)	1.「～年 (または歳) 頃は、どこそこで、～のようなことをしていた (1 日以上持続時間)」または、2.「～のようなことをしたけれど (1 日以下の持続時間)、いつだったか、どこだったか覚えていない」
1	1.漠然とした出来事 (繰り返されたり持続したりしている時間的あるいは空間的に特定されない情報源、または、2.唯一のだけが詳細がなく時間的かつ空間的に特定されない情報源=個人的な漠然とした印象)	1.「その頃は、～のようなことをしていた (1 日以上持続時間)」または、2.「～のようなことをしたけれど、いつだったか、どこだったか覚えていない」
0	返答なし、あるいは、一般的な情報	「特にありません」、「私は～だ」

**Table 2.** Mean responses and standard deviation of each evaluation of TEMPau.

評価項目	時期									
	時期 1		時期 2		時期 3		時期 4		時期 5	
	mean	sd	mean	sd	mean	sd	mean	sd	mean	s d
エピソード性	10.67	1.54	12.56	1.24	10.39	2.26	11.22	3.34	12.39	2.39
最詳細	0.22	0.44	0.67	0.71	0.33	0.50	0.44	0.73	0.56	0.68
自発性	13.44	2.88	14.11	1.54	12.56	3.40	11.78	3.46	14.83	1.06
F	2.00	1.12	2.56	1.33	1.67	1.50	2.33	1.50	2.89	1.27
O	1.33	1.00	0.78	0.83	1.00	1.12	0.44	1.33	0.50	0.87
F&O	0.56	0.53	0.56	0.88	0.89	1.05	0.78	1.30	0.50	0.66
何R	2.11	1.54	3.67	0.71	3.11	1.17	3.33	1.00	3.89	0.22
どこR	2.33	1.32	3.11	0.78	2.89	0.78	3.44	0.88	3.89	0.22
いつR	1.00	1.00	2.78	0.67	3.00	1.00	3.00	1.00	3.72	0.36
総R	5.44	2.41	9.56	1.50	9.00	2.31	9.78	2.25	11.50	0.62
何K	1.78	1.39	0.22	0.44	0.44	0.88	0.22	0.67	0.00	0.00
どこK	1.56	1.13	0.78	0.83	0.67	0.50	0.11	0.33	0.00	0.00
いつK	2.89	0.93	1.00	0.87	0.56	0.73	0.56	0.88	0.17	0.35
何Rj	2.11	1.54	3.67	0.71	3.11	1.17	3.22	0.97	3.78	0.36
どこR j	2.11	1.36	2.67	1.22	2.89	0.78	3.44	0.88	3.78	0.36
いつRj	0.89	1.05	2.78	0.67	2.89	0.93	2.89	0.93	3.50	0.56
総Rj	5.11	3.95	9.11	2.60	8.89	2.88	9.56	2.78	11.06	1.29

についてのピアソンの積率相関係数を算出した。その際には、BDI-IIは総得点、ERQは、抑制と再評価の各下位尺度得点、トレイルメーキング課題は反応時間(秒)、文字記憶課題は、16試行の平均正答数を用いた。

## 結果

各得点の時期ごとの平均値と標準偏差をTable 2に示した。

エピソード性の分析では、時期の主効果に有意な傾向が認められた ( $F(4,32)=2.15, p<.10$ ) が、有意水準10%によるHSD検定により多重比較を行ったが、いずれの時期にも有意な傾向が認められなかった。最詳細得点は有意ではなかった ( $F(4,32)=0.92, n.s.$ )。

自発性得点については、有意な時期の主効果が認められ ( $F(4,32)=2.91, p<.04$ )、時期5が時期4より多かった ( $p<.05$ ) が、他の時期間には差は認められなかった (Figure 1)。

視点についての分析では、F反応は時期の主効果が有意であり ( $F(4,32)=2.77, p<.05$ )、時期5が時期3より有意に多く ( $p<.05$ )、他の時期には差はなかった (Figure 2)。O反応では時期の主効果が有意ではなかった ( $F(4,32)=1.99, n.s.$ )。

R反応についての分析では、まず、何R反応については、主効果が有意であり ( $F(4,32)=4.52, p<.01$ )、時期1が時期2と時期5より有意に少なかった ( $p<.05$ ) が、他の時期間には差は認められなかった (Figure 3)。どこR反応については、主効果が有意であり ( $F(4,32)=4.54, p<.01$ )、時期1が時期5に比べて有意に少なかった ( $p<.05$ ) が、他の時期間には有意な差は認められなかった (Figure 4)。いつR反応については、主効果が有意であり ( $F(4,32)=14.33, p<.001$ )、時期1が他のすべての時期より有意に少なかった ( $p<.05$ ) が、他の時期間には差は認められなかった (Figure 5)。総R反応数については主効果が有意であり ( $F(4,32)=12.15, p<.001$ )、時期1が他のすべての時期に比べて有意に少なく ( $p<.05$ )、時期3が時期5に比べて有意に少ない傾向を示した ( $p<.10$ ) が、他の時期間には差は求められなかった (Figure 6)。総Rj反応数についても主効果が有意であり (Rj反応:  $F(4,32)=12.93, p<.001$ )、総Rjについては時期1が他のすべての時期に比べて有意に少なく ( $p<.05$ )、他の時期間には差は認められなかった (Figure 7)。

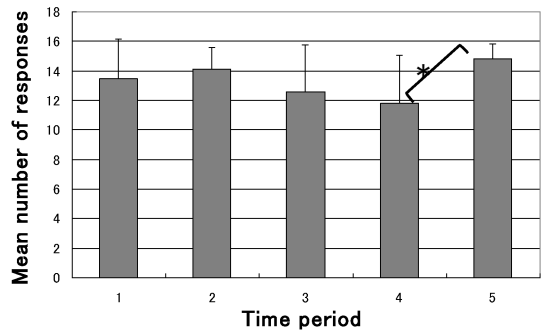


Figure 1 Mean number of spontaneity. \* $p<.05$

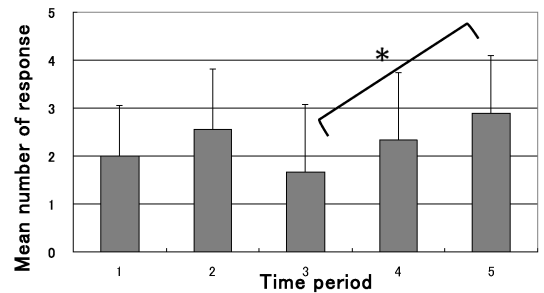


Figure 2 Mean Number of yes-responses for visual-field point of view. \* $p<.05$

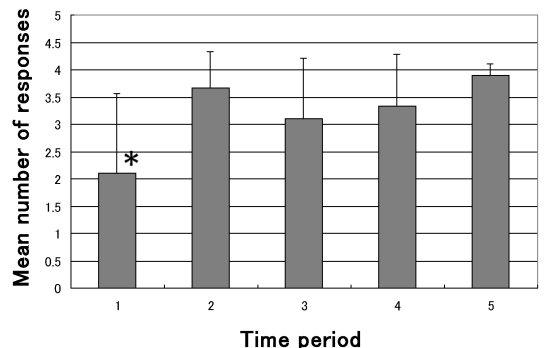


Figure 3 Mean number of R-what responses. \* $p<.05$

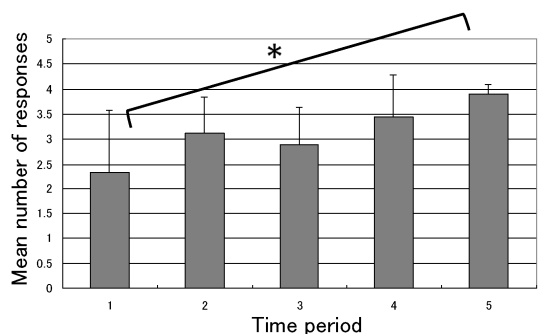


Figure 4 Mean number of R-where responses. \* $p<.05$

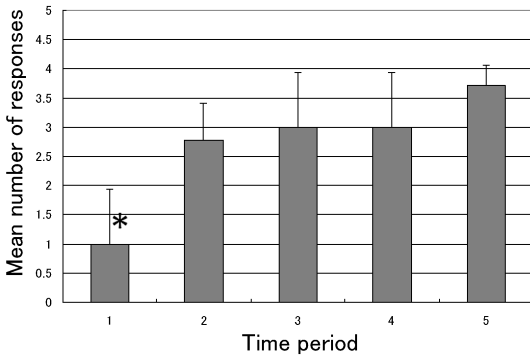


Figure 5 Mean number of R-when responses.

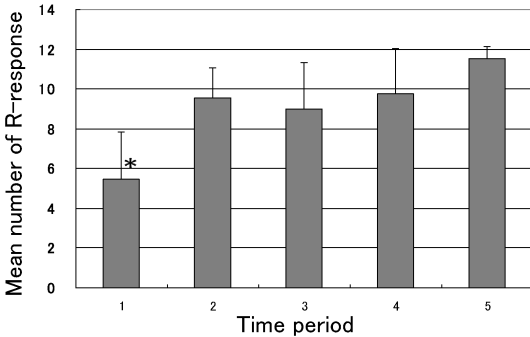


Figure 6 Mean number of total R-responses.  
\*p<.05

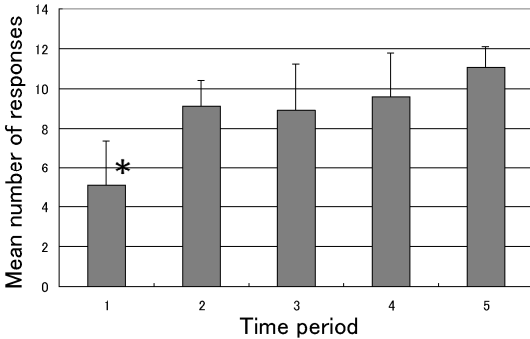


Figure 7 Mean number of total Rj-responses.  
\*p<.05

総R反応と総Rj反応の相関は、有意な正の相関が認められた ( $r=.984, p<.001$ )。

各評価項目と他の検査との相関はTable 3 に示した。ERQやBDIとは無相関であったが、特に文字記憶課題では自発性やR反応との有意な正の相関または有意傾向が認められた (自発性:  $r=.839, p<.01$ ; 何R:  $r=.813, p<.01$ ; 総R:  $r=.663, p<.10$ )。トレイルメーカー課題では最詳細得点と正の相関、視野視点と負の相関の有意傾向が認められた (最詳細:  $r=.636, p<.10$ ; 視野視点:  $r=-.602, p<.10$ )。

### 考察

エピソード性得点については、明確な時期による差は認められず、最詳細得点においても有意な時期の差は認められなかったことから、どの時期においても想起された自伝的エピソードの詳細さは保たれていることが示された。オリジナル版の健常者データの平均エピソード性得点と比較すると、例えば時期1では、40代が10.91 (sd=4.03)、50代が9.45 (sd=5.73)、時期5では、40代が11.09 (sd=4.68)、50代が11.64 (sd=3.78) となり、時間的な傾斜はない点で一致することが示唆されるが、本研究の方が若干高めとも考えられ、さらなる比較検討は今後必要であろう。

エピソードの詳細さについて時期的な差がないにも関わらず、R反応については時期の差が認められた。特に、何R反応、いつR反応、どこR反応のいずれにおいても時期1が最も少なくこれは総R反応でも同様であった。時期1は17歳までの子供時代なので、再生の際の自己認識的意識が低いと考えられる。何R反応およびどこR反応は時期5が有意に少ないという結果が示されたが、これは中高年以降では、最近1年間の自伝的記憶が若年より悪い傾向にあるという結果 (関口, 2002) とも一致する。またオリジナル版との比較

Table 3 Pearson correlations of each evaluation of TEMPau with ERQ, BDI, and executive functions tasks.

評価項目	TEMPau										ERQ		BDI		Executive functions		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15		
1.エピソード	—																
2.最詳細	.535	—															
3.自発性	.697 *	.451	—														
4.視野F	.013	-.190	.057	—													
5.視野O	.049	-.010	.224	-.810 **	—												
6.何R	.601 †	.771 *	.824 **	-.284	.303	—											
7.どこR	.622 †	.054	.517	.407	-.111	.262	—										
8.いつR	.307	-.133	.383	.429	-.145	.196	.881 **	—									
9.総R	.660 †	.338	.753 **	.198	.043	.660 †	.876 **	.842 **	—								
10.総Rj	.678 *	.225	.661 †	.386	-.106	.463	.961 ***	.848 **	.943 ***	—							
11.ERQ-R	-.136	.071	-.353	-.271	-.187	-.001	-.043	.077	.012	-.041	—						
12.ERQ-S	-.110	.249	-.080	.005	.060	.135	-.052	.148	.101	-.048	-.269	—					
13.BDI	.099	.134	.358	-.320	.647	.384	.045	.028	.213	.182	-.402	.190	—				
14.TM-B	-.048	.636 †	.033	-.602 †	.326	.576	-.243	-.115	.131	-.112	.448	.435	.244	—			
15.LM	.423	.420	.839 **	.039	.057	.813 **	-.339	.351	.663 †	.544	.067	-.247	.262	.230	—		

† p<.10, \* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.001.



では、例えば時期5の何R反応では、40代が3.95 (sd=0.15)、50代が3.68 (sd=0.34)となり、どこR反応では、40代が3.95 (sd=0.15)50代3.73 (sd=0.52)となり、日本語版とのおよそ一致するデータが得られたと考えられる。また、真偽性についても、第1回目の検査でR反応の数と第2回目に同エピソードについての総Rj反応の数は有意な正の相関が認められ、その場で思いついた偽の自伝的エピソードを話していたということはないことが示されたと考えられる。

自発性得点では、時期4が時期5より少ないが、他の5時期には差は認められなかった。時期5は最近1年間であり、インタビューの際にもすぐに想起がされていたが、時期4は最近1年間を除く最近5年間であり、インタビューでも想起まで時間がかかる傾向にあったことを示している。

F視点は、最近の方が多いとされているが、本研究では時期5が時期3より有意に多かったのみで他の時期との差は認められなかった。F視点や総Rj反応数では、30歳を超えてから最近5年前までの時期3が最も少なくなることが示され、最近に比べてこの時期は、自己認識的意識が低く、視野視点が持ちにくいので、「思いだしているという実感があまり湧かない」ということを示していると考えられる。

他の尺度や課題との相関では、ERQやBDIとは無相関であったが、実行機能の課題との相関が認められた。このうち文字記憶課題は、更新機能を測定する課題であり、ワーキングメモリー課題でもあるが、自発性や何R反応との有意な正の相関を示し、総Rj反応とも正の相関の傾向を示した。またトレイルメーカー課題は、最詳細得点やF視点とも正の相関の傾向を示している。特にR反応は、本研究で用いた個別の切り替え機能や更新機能を測定する課題以外にも総合的な実行機能測定課題（例えばウィスコンシンカードソート課題やオペレーションスパン課題）とも相関が示され、更新機能は老化による記憶の低下と相関が示されていること（Clarys et al., 2009）から、本研究においても中高年の自伝的エピソード記憶の再生におけるR反応との相関が見いだされたと言える。今後実行機能課題の成績や実行機能質問紙（関口・細田・中山, 2009）と日本語版TEMPauの諸評価得点との関係を調べることも興味深い研究と考えられる。

本研究は、Piolino et al. (2003) により開発された自伝的エピソード記憶検査（TEMPau, Test Episodique de Mémoire du Passé autobiographique,

Piolino et al., 2003）の日本語版作成を試みることを目的として行われた。しかし、実験参加者が40代～50代の女性に限られていたため、今後は、日本語版自伝的エピソード記憶検査の妥当性を検討するために、健全な検査参加者のデータを多く収集し、他の年代間・性別間の比較、自伝的エピソード記憶が低下するとされている記憶障害や統合失調症・大うつ病の患者との比較などが必要であろう。

## 引用文献

- Brittlebank, A.D., Scott, J., Williams, J.M.G. & Ferrier, I.N. 1993 Autobiographical memory in depression : state or trait maker? *British Journal of Psychiatry*, 162, 118-121.
- Conway, M.A. 1990 *Autobiographical Memory: An introduction*. Open University Press. Milton Keynes, Philadelphia.
- Borriani, G., Dall'ora, P., Della Sala, S., Marinelli, L. & Spinnler, H. 1989 Autobiographical memory : Sensitivity to age and education of standardized enquiry. *Psychological Medicine*, 19, 215-224.
- Conway, M.A. 2001 Sensory-perceptual episodic memory and its context: autobiographical memory. *Philosophical Transactions of the Royal Society London : Biological Sciences*, 356, 1375-1384.
- Cabeza & St.Jacques 2007 Functional neuroimaging of autobiographical memory *Trends in Cognitive Neuroscience*, 11, 219-227.
- Clarys, D., Bugaiska, A., Tapia, G. & Baudouin, A. 2009 Aging, remembering, and executive function. *Memory*, 17, 158-168.
- Levine, B. 2004 Autobiographical memory and the self in time: brain lesion, functional neuroanatomy, and lifespan development. *Brain and Cognition*, 55, 54-68.
- Tulving, E. 2002 Episodic memory: from mind to brain. *Annual Review of Psychology*, 53, 1-25.
- Beck, A.T., Steer, R. & Brown, G. 1996 Beck Depression Inventory—Second edition, Harcourt Assessment, Inc. (日本語版 小嶋雅代・古川壽亮 2003 BDI-II 一ベック抑うつ質問票— 日本文化科学社 東京).
- D'Argembeau, A. & Van der Linden, M. 2006 Individual differences in phenomenology of mental time travel: The effect of vivid imagery and emotion regulation strategies. *Consciousness and Cognition*, 15, 342-350.
- Danion, R.J., Cuervo, C., Piolino, P., Huron, C., Riutort, M., Peretti, C.S., & Eustache, F. 2005

- Conscious recollection in autobiographical memory: an investigation in schizophrenia. *Consciousness and Cognition*, 14, 535–547.
- Gardiner, J.M. 2001 Episodic memory and autoeitic consciousness: a first-person-approach. *Philosophical Transaction of the Royal Society London B*, 356, 1351-1361.
- Gardiner, J.M., Ramponi, C., & Richardson-Klavehn, A. 1998 Experiences of remembering, knowing, and guessing. *Consciousness and Cognition*, 7, 1-26.
- Gross, J.J. & John, O.P. 2003 Individual differences in two emotion regulation processes: implications for affect, relationship, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 348-362.
- John, O.P. & Gross, J.J. 2004 Healthy and unhealthy emotion regulation: personality processes, individual differences, and life span development. *Journal of Personality*, 72, 1301-1334.
- Johnson, M.K., Foley, M.A., Suengas, A.G. & Raye, C.L. 1988 Phenomenal characteristics of memories for perceived and imagined autobiographical events. *Journal of Experimental Psychology: General*, 117, 371-376.
- Lemogne, C., Piolino, P., Friszer, S., Claret, A., Girault, N., Jouvent, R., Allilaire, J.F., & Fossati, P. 2006 Episodic autobiographical memory in depression: Specificity, autoeitic consciousness, and self-perspective. *Consciousness and Cognition*, 15, 258–268.
- Matuszewski, V., Piolino, P., de la Sayette, V., Lalevée, C., Pélerin, A., Dupuy, B., Viader, F., Eustache, F. & Desgranges, B. 2006 retrieval mechanisms for autobiographical memories: insights from the frontal variant of frontotemporal dementia. *Neuropsychologia*, 44, 2286-2397.
- Miyake, A., Friedman, N.P., Emerson, M.J., Witzki, A.H., & Howerter, A. 2000 The unity and diversity of executive functions and their contributions to complex “frontal lobe” tasks: A latent variable analysis. *Cognitive Psychology*, 41, 49–100.
- Nandorino, J.-L., Pezard, L., Poste, A., Réveillère, C. & Beaune, D. 2002 Autobiographical memory in major depression : A comparison between first-episode and recurrent patients. *Psychopathology*, 35, 335-340.
- Nigro, G & Neisser, U. 1983 point of view in personal memories. *Cognitive Psychology*, 15, 467-482.
- Piolino, P., Desgranges, B. & Eustache, F. 2000 *Collection Neuropsychologie La mémoire autobiographique: théorie et pratique*. Solal, editeur, Marseille.
- Piolino, P., Desgranges, B., Banali, K. & Eustache, F. 2002 Episodic and semantic remote autobiographical memory in aging. *Memory*, 2002, 10, 239-257.
- Piolino, P., Desgranges, B., Belliard, S., Matuszewski, V., Lalevée, C., de la Sayette, V. & Eustache, F. 2003 Autobiographical memory and autoeitic consciousness: triple dissociation in neurodegenerative diseases. *Brain*, 126, 2203-2219.
- Piolino, P., Desgranges, B., Clarys, D., Guillery-Girard, B., Tacoscnnat, L., Insignrini, M., & Eustache, F. 2006 Autobiographical memory, autoeitic consciousness and self-perspective in aging. *Psychology and Aging*, 21, 510-525.
- Quinette P, Guillery B, Desgranges B, de la Sayette V, Viader F, Eustache F. 2003 Working memory and executive functions in transient global amnesia. *Brain*, 126, 1917–34.
- Reitan, R.M. 1958 Validity of trail making test as an indication of organic brain damage. *Perceptual and Motor Skills*, 8, 271-276.
- Rubin, D.C., Schrauf, R.W. & Greenberg, D.L. 2003 Belief and recollection of autobiographical memory. *Memory & Cognition*, 31, 887-901.
- Robinson, J.A. & Swanson, K.L. 1993 Field and observer modes of remembering. *Memory*, 1, 169-184.
- 関口理久子 2002 「私の記憶」と「私についての記憶」－自伝的記憶検査作成の試み 1－関西大学社会学部紀要, 33, 307-324.
- 関口理久子・紺田広明・中山皓平 2009 実行機能質問紙 (Executive Functions Questionnaire) 作成の試み 第7回日本認知心理学会 (於立教大学) 発表抄録集.
- Tulving, E. 2002 Episodic memory: from mind to brain. *Annual Review of Psychology*, 53, 1–25.
- Williams, J.M.G. 1999 Depression and the specificity of autobiographical memory. In Rubin, D.C. (Ed.) Remembering our past : studies in autobiographical memory (pp244-267), Cambridge university press, UK.
- Williams, J.M.G. & Scott, J. 1988 Autobiographical memory in depression. *Psychological Medicine*, 18, 689-695.
- Van Vreeswijk, M.F. & De Wilde, E.J. (2004) Autobiographical memory specificity, psychopathology,

depressed mood and the use of the autobiographical memory test : meta-analysis. *Behaviour Research and Therapy*, 42, 731-743.

(2010.1.25 受稿 2010.1.26 受理)

### Appendix 1 Instruction for the participants at the beginning.

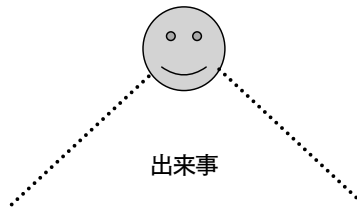
特別な出来事、それは・・・

- 1日以下の持続時間で ● たった一度しか起こらない
- もう一度体験しているかのように、どんな些細な詳細に至るまで語ることができる出来事である。  
もし可能ならば、次の質問に教えてください。
- 何が起こったか? ● 自分の知覚、感覚、考えはどんなだったか? ● 誰がいたか?
- その出来事の前後には何が起こったか? ● どこで起こったか? その時自分はどこにいたか?
- いつ起こったか? ● 何年で、自分は何歳だったか?
- 季節、日、時間 (朝、昼、午後、夕方、夜) はいつだったか?

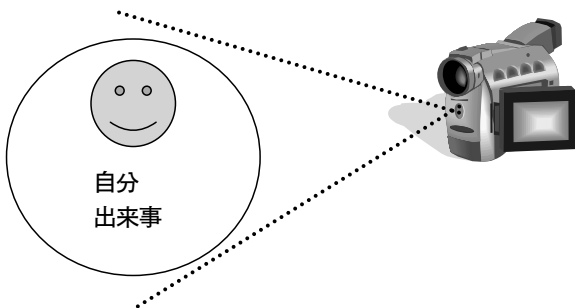
### Appendix 2 Instruction for the visual point of views.

● 視点について

1. 思い出した出来事を、あたかも自分の目を通して見ているように感じる。



2. 思い出した出来事を、外から見ているように感じる。



3. 自分の目で見るように感じたり、外から見ているように感じたりする。

### Appendix 3 Instruction for the auto-noetic consciousness (Remember / Know).

● 意識の状態について

思い出した出来事は・・・

1. 明瞭に思い出することができる。  
まるで昨日のことにように、その時の感覚や詳細に至るまで思い出することができる。
2. 体験した瞬間について本当は思い出していない、あるいは、非常に漠然としか思い出せないが、知っているという感じはする。
3. ある出来事を体験したと感じはするが、確信は持てない。

## Appendix 4 Sample scores of TEMPau (First test)

氏名 \*\*\*\*\*

検査用紙3: TEMPau 集計表(スコア)

時期	項目No	エピソード性	strictly episodic	自発性	F (A)	O(S)	F/O (A/S)	何 (What, Quoi)			どこ (Where, Ou)			いつ (When, Quand)		
								R(So)	R(So)justifie	K(Sa)	R(So)	R(So)justifie	K(Sa)	R(So)	R(So)justifie	K(Sa)
幼年期から 思春期 (0-17)	1	2.5		4			x	x	x			x				x
	2	2.5		4	x			x	x		x	x				x
	3	2.5		4		x		x	x		x	x		x	x	
	4	2.5		4		x		x	x		x	x				x
	NT	10	0	16	1	2	1	4	4	0	3	3	1	1	1	1
青年期 (18-30)	5	4	x	3			x	x	x		x	x				x
	6	2		2		x		x	x		x	x		x	x	
	7	3.5		4		x		x	x			x	x	x		
	8	3		3			x	x	x			x				x
	NT	12.5	1	12	0	2	2	4	4	0	2	2	2	2	2	2
成人期 (30以上)	9	3		3			x	x	x		x	x		x	x	
	10	3		3		x		x	x			x	x	x		
	11	3		3		x		x	x		x	x		x	x	
	12	4	x	4			x	x	x		x	x				x
	NT	13	1	13	0	2	2	4	4	0	3	3	1	3	3	1
最近年間	13	2.5		3			x	x	x		x	x				x
	14	4	x	4			x	x	x		x	x		x	x	
	15	3.5		3			x	x	x			x	x	x		
	16	4	x	4			x	x	x		x	x				x
	NT	14	2	14	0	0	4	4	4	0	3	3	1	2	2	2
最近12ヶ月	17	4	x	4			x	x	x		x	x		x	x	
	18	3.5		4			x	x	x		x	x		x	x	
	19	4	x	3		x		x	x		x	x		x	x	
	20	4	x	3		x		x	x		x	x		x	x	
	21	3		3			x	x	x		x	x		x	x	
	22	3		4			x	x	x		x	n		x	x	
	23	4	x	3			x	x	x		x	x		x	x	
	24	3		3			x	x	x		x	n		x	x	
NT	28.5	4	27	0	4	4	8	8	0	8	6	0	8	8	0	0